

ミュージアムの経営人類学

—アーカイブズの経営戦略への提言—

国立民族学博物館教授 中牧 弘允

1 アーカイブに囲まれている私

私は博物館勤務ということで、公文書館とは縁が深いはずですが、あまりアーカイブズについて考えたこともなく過ごしておりました。私の専門としているのは宗教、特に日本国内の宗教を中心に、世界各地に広がっていった日本の宗教も追いかける研究をしてまいりました。

その関係で、日本人の海外移住者がつくったコミュニティの研究もしています。最初は北海道の調査をいたしました。その後、ハワイに行きまして、次は“本土上陸”だということでカリフォルニアまで足を伸ばし、南米の方にもということでブラジルを中心とした調査をしております。

まず、私の身の回りの世界でアーカイブというものはこんなものだというところをお伝えして、それを出発点として考えてみたいと思います。

よくよく考えてみると、私はけっこうアーカイブに囲まれているということがよくわかりました。わが研究室や書斎は、実は書籍をファイルが駆逐しております。そのファイルはオープンファイルと言われているもので、民博の初代の館長でもあった梅棹忠夫先生が、『知的生産の技術』という大ベストセラーを書いたときに、オープンファイルという方式で書類を整理することを提示されたわけですが、私もそれにならって、挫折を経ながら実践しております。ファイルの中にはいろいろなものが入っており、論文の抜き刷りとか手紙類、コピー、メモ、あるいは地図、写真、ポスター、統計の類、また小冊子とか図録とか要覧とか、まともな本としては扱われないようなものもこのファイルの中に

入っています。

民博には立派な図書館がございます。100万冊は収容可能だといわれていますが、そこには実はいろんな形のアーカイブが収められております。また、写真とかビデオとか、そういう映像関係の記録類も豊富でございます。そういったものをこれからどう整理をし、そして一般にそれを公開していくかということを検討しようという委員会がようやく今年度立ち上がったところです。

また、民博に付置されております地域研究企画交流センターは地域研というふうに通称しておりますが、そこが持っている「英国議会資料・京セラ文庫」は有名です。稲盛和夫氏（京セラ会長）に協力を仰いで民博に収まったという経緯があるのですが、19世紀からほぼ2世紀近い間にイギリスの外交官が本国に書き送った資料をかなり網羅的に集めたところのコレクションです。

それから、梅棹忠夫関連資料もございます。また教員の刊行物という棚がございます。教官が民博に赴任してきて以降どれだけの業績を上げたかということ、単行本あるいはファイルの形で収めているものです。ここには現役の方々の棚がありまして、今から30年ぐらい前から、自分で自分の業績を整理して、刊行順に並べるということをやっております。

というのも、われわれには弟子がいなかった。普通ですと大学の研究室や講座の場合ですと、退官のときに弟子が集まってみんな業績をまとめてくれるわけですね。ところがそういうことがわれわれにとっては期待できない、自分でやるしかない。ご先祖様の祭祀に希望をつなぐことができない。自分で自分を祀らないと後世に残せないという事情がございました。実はこういう棚をつくることによって研究者同士が競争をするというか、いい意味での競争原理を働かせるということがあります。

研究者というのはやはり自分でテーマを追いかけて、調査をして、そしていろんな事実を明らかにしていくということですので、そういう内燃的な炎を燃

え上がらせるための装置として機能しています。もう1つは、国費を使った研究施設に勤めている者が、きちんと公に業績を示すという、そういう評価の対象にもなるという、2つの大きな意味を持ったものとして教員の刊行物の棚はスタートしました。

今でこそ国立大学も独法化して、研究業績がうるさく言われますけれども、今から30年ぐらい前に民博は業績を測っていると揶揄されながら、しかしきちんとそれをファイル化してきたという歴史があります。これなどはまさにアーカイブです。



さて、次はN I R A（総合研究開発機構）ですけれども、ここも私、非常勤の理事という形で、いろんな仕事をしているのですが、もともと経済企画庁や国土庁の方々が中心になって民間や地方自治体と一緒に作ったシンクタンクで、そういった関係のアーカイブがございます。

そこには、大来記念政策研究情報館が開設されておりまして、大来佐武郎著作物というのがアーカイブになっております。ご存じのように、大来さんはエコノミストで経済官僚、それでN I R Aの評議会議長だったのですけれども、外務大臣をされたことで有名ですね。経済政策史とか経済政策思想史の貴重な

史料が収められています。日本における経済計画、特に国民所得倍増計画等々に関する史料も収められています。これがN I R Aアーカイブの一つの柱です。

もう一つは、下河辺淳アーカイヴと言われているものです。元国土庁事務次官で、N I R Aの第二代目の理事長をされた下河辺淳さんは、まさに「全総の下河辺」と言われているように、戦後日本の国土計画の初めからずっとかかわってこられました。「全総のデザイナー」というような異名をとる方でありますけれども、そういう方の著作物のすべてが収められているわけです。日本の戦後の経済政策、国土政策というテーマの場合には、このN I R Aの二つのコレクションが大きな意味を持つてくるわけです。そういうところにながら、私がそれを十分に活用しているかということ、そうではないところがつらいところではあります。

最後はJ I C Aの横浜国際センターの2階に設置された海外移住資料館ですが、ここは2002年に展示がオープンしました。私も委員のひとりとして深くかかわってきました。

展示は大きく分けて三つに分かれています。一つが海外移住の歴史、もう一つは「新世界に参加す」で、モノの資料を中心とした展示です。第三はコンピューターを使ったデジタルなアーカイブ、われわれは「デジタル移住スペース」と称しておりますけれども、いろいろ検索のできる空間です。アーカイブと関係の深いのは、この海外移住の歴史というコーナーでして、アーカイブが非常に役に立ったわけです。たとえば、御免の印章という、今で言うところのパスポートですけれども、江戸の末期に使われていたものが展示されています。外務省の外交史料館のオリジナルから複製を作りまして、日米通商条約とあわせて、たいへんお世話になっています。博物館の歴史展示にとって、史料館、アーカイブというのは非常に大きな意味を持っています。

U C L AのJ A R Pは、ジャパニーズ・アメリカン・リサーチ・プロジェクト

トの略で1960年代の初めぐらいにできたものでして、アメリカで集めた一世、二世等の埋もれた、そして散逸してしまいがちな資料を集め、それを整理し、保存し、カタログを出しております。今、日系アメリカ人の研究をする場合には、JARPコレクションの世話にならない人はいないというぐらいのコレクションで、われわれも頼りにさせていただきました。

展示場入口のシンボル展示はローズ・フェスティバルの野菜山車（ベジタブル・フロート）ですが、これは1920年にアメリカはオレゴン州ポートランドのローズ・フェスティバルに日本人たちが出した山車の一部を復元して展示しているわけです。片面の屋根は星条旗ですけれども、自分たちがとったジャガイモを並べて星に見立てているわけですね。このジャガイモの数は48です。まだハワイ、アラスカは入っておりませんでしたので、48個の星条旗です。

こういう展示が可能になったのは、実はオレゴン州ポートランドにあるところのオレゴン・ヒストリカル・ソサエティのアーカイブのおかげでした。そこに残されていた1枚の写真、それをロサンゼルスにある全米日系人博物館の人たちが展示のためにスライドを撮り、そのスライドを民博での講演のときに見せてくれたわけです。

たまたま私はそのころ展示の構想をしております、あるとき、あそこで見たあのベジタブル・フロート、これが新世界に参加した日本人の証として象徴的に物語るものとしてはすごくいいのではないかとひらめきまして、そのレプリカをつくろうと提案し、製作をしたわけです。こんなふうに、それこそ思わぬ連鎖でアーカイブの一枚の写真から展開するということが驚きでもあります。

これは余談ですけれども、昨年4月に天皇・皇后両陛下が海外移住資料館を訪ねたときに、JICA側としては緒方貞子理事長がお迎えをしました。写真で日系人のライフヒストリーを見せるというコーナーで、天皇・皇后両陛下が

写真を見ていたときに、緒方さんがかつかつかと来まして、「これは私です」という。その写真は、先ほどのオレゴン・ヒストリカル・ソサエティのアーカイブから出てきた写真で、かわいい5歳ぐらいの少女がおひな様に囲まれて写っている写真だったのですね。これは日系人社会の新聞に掲載された写真で、アーカイブに収められていました。それが、映画のジュラシックパークじゃありませんけれども、ジーンバンクといいますか、データベースといいますか、そういう形で思わぬときに出てきたわけです。

アーカイブを本格的に使ったのは、この海外移住の歴史のコーナーでありまして、海外移住の歴史を45期に分けました。先ほどの御免の印章や日米通商条約の複製が展示されているわけですね。そういったときに、文字だけが並ぶと見てもらえないわけですが、キャッチアイというようなことを苦心して考え、編み出して、それを展示につなげていくわけです。そういったときに強い味方になっていただいたのが外交史料館であり、ほかのアーカイブであったということです。

今、海外移住資料館では、海外移住の関連シソーラスづくりの作業に取り組んでおります。ここではJICA・OBの方々がボランティアでシソーラスづくりに参画していますので、シソーラスというのは一体何なんだということを彼らに説明するときに、「本には索引というのがあるでしょう。コンピューターで情報を探するための辞典というか索引をつくといろんな形の組み合わせができて、アクセスするときに便利です」というようなことを説明しながらはじめたところです。これでアーカイブへのアクセスも容易になるはずですよ。

2 企業博物館のアーカイブ

企業博物館のアーカイブですけれども、私はたまたま企業博物館の調査を民博の共同研究あるいは科研費を使ってやってきました。一つの事例をまずお話

したいと思います。

札幌に雪印乳業史料館というのがあり、昭和52年に開館しています。それ以前は工場見学のあと、雪印の製品が試飲できるという趣向でした。展示スペースは3つあり、関係者の方々は、1階は牧場、2階は工場、3階は市場というふうに語呂合わせで説明をしていたようですが、牛を飼うところから始まって、搾乳をして、そして工場に送られて製品化するプロセスが展示されています。問題はこの3階であります。「市場」と言っておりますけれども、内容的には雪印乳業の創立者とか、偉い先輩方の像がならび、歴史資料が一般公開された形で陳列されています。宣伝パンフレットもあれば過去の製品なども陳列されており、3階まで行く人はあまりいないのですが、その歴史資料の中に私はおもしろい文書を発見いたしました。

それは、1955年に東京都の八雲工場で発生した学校児童の脱脂粉乳中毒問題のときに出された社長の文書です。「会社員に告ぐ」というもので、そこにはどう書かれているかといいますと、「当社30年の光輝ある歴史に拭うべからざる一大汚点を残した。」と書かれており、「牛乳及び乳製品を最も衛生的に生産し、これを豊富に国民に提供することが当社の大なる使命であり、また最も誇りとするものであるが、この使命に反した製品を供給するに至っては、当社存立の社会的意義は存在しないのである。」とあり、そして、「諸君がもし会社と運命を共にする決意があるならば、必ず私のこの心からの願いを諸君の心として社業に専念せられることを信じ、あえてこれを全社員の心に訴える次第である。」という、一枚物の文書が残されており、私は、当時の昭和30年の社長さんは立派だなと思ったものですから、フィールドノートにこの全文をメモしたのです。それはもう今から7～8年も前のことでした。

その後、2000年の6月、これは皆さんの記憶にも新しいと思いますけれども、大阪を中心に集団食中毒事件を起こし、被害者は1万5,000人にも上り、社長

さんは非常にまずい対応をされて退陣に追い込まれ、大阪工場は閉鎖にまで至ったということがありました。

もちろんその後雪印は、再建計画を立て、安全を目指し、社内の立て直しを図っているわけですが、そのとき問われたのが危機管理意識とか、現場重視の気風の欠如とか、そういうことであつたわけです。

私は、その史料館で一般の人にも公開している、過去の社長の気概、そして全社員が身を挺して取り組んだことがあつたのにもかかわらず、なぜという疑問が拭えなかつたわけです。企業博物館やアーカイブが果たす意味、役割というものを深く感じた一例であります。

会社の運営する博物館は、創業者の事績を顕彰し、会社の栄光ある足跡を展示するというところに主眼が置かれているわけですが、同時に散逸してしまう会社の資料を保管し、あるいはまた、会社に取り組んできた技術を後世に残すという意味も強く含まれているわけで、それが現実のビジネスの世界で商売なりあるいは生産なりをしている会社にとって意味のある情報のリソースだということが、時として忘れられているのではないかというふうにも考えたわけです。本来持っている企業博物館の企業自体に対する意味というものが軽視されてはいないかということを感じた1つの事件でありました。

3 責任に対する支援

私は最近アーカイブに大きな変化がおきていることに気がつきました。それは、こちらで昨年11月に開催されました「未来に残す歴史的文書：アーカイブズの充実に向けて」というシンポジウムの報告から私が学んだことであります。そこでオーストラリアの国立公文書館副館長のスティーブ・スタッキーさんという方が指摘していることですが、政府の記録を保存し、一般の人あるいは国民に対してアクセスさせるようにする、これがアーカイブの役割だとい

うふうに考える、これが一番です。

しかしながら、第二点としては、政府の記録の作成及び管理を確実にして、説明責任を持つ政府を支援することをしてきています。この第二の説明責任を持つ政府を支援することにアーカイブの重点が移っているということを知りました。先ほどの雪印の話もそうですが、会社の経営陣のアカウンタビリティ、あるいはコーポレート・ソーシャル・リスポンシビリティ（CSR）、つまり企業の社会的責任ということが最近強く言われております。そういう中でアーカイブの持っている意味というのは、過去を顕彰し、偉大な先人の足跡を展示する、そしてその歴史的文書を保存し、あるいは技術を保護するだけでなく、経営陣が社会に対して責任を果たしていく、コーポレート・ソーシャル・リスポンシビリティに十分役立つのが企業博物館の持っている1つの性格ではないかと考えています。

企業の場合は、説明責任を持つトップマネジメントを支援するというふう
に意識変革、あるいは体制の立て直しというものが図られる必要があるのでは
ないかと感じたわけです。

雪印の場合ですと、安全というよりはむしろ人々に対して安心を提供してい
く姿勢が経営トップには必要ではないかと思ったわけです。そういうときにア
ーカイブが果たす意味はこれからますます大きくなるのではないかと思ったわ
けです。

4 企業博物館の歴史展示

もう1つの事例を紹介いたします。

これは新居浜にあります別子銅山の記念館で、住友系のものです。ここの展
示は、閉山年に採掘された大きな銅鉱石、これが入口にほんとあり、中には元
禄時代、幕府に提出した別子開坑許可の願書があります。そういうものの間に

挟まれた歴史を顕彰する記念館ないし装置としてつくられています。

しかし、別子銅山は閉山されたので、ある意味ではこれは過去の歴史を紹介することによって、先輩たちの営みを鎮魂する、つまり魂鎮めを行う装置というふうにも考えることもできると思ったわけです。

企業博物館が持っている機能の1つとして、顕彰があります。企業の足跡を、人であれ、会社であれ、顕彰していく。自らがそれを評価し、顕彰するという、そういう役割があるわけです。

そういったときに、顕彰と同時に鎮魂、それはある意味では関係者たちの魂を鎮めるといような、別に祟りを恐れるわけではありませんけれども、しかし波乱万丈の歴史、あるいは光と陰のある歴史というふうに表示しても構わないのですが、そういった面、例えば別子銅山の場合ですと、地域社会に対する公害ですね、明治年間の場合ですと、その煙の害が広がって、無人島に工場を移した。しかしそれでもさらに害が広がって行って、公害を出さないような処理方法を導入して解決していくわけです。そういう取り組みの歴史があり、それが展示されているわけです。

広瀬幸平という「中興の祖」の歴史記念館も併設されておりますが、顕彰を通して、過去の栄光だけではなく、暗い部分についてもきちんと展示をするという姿勢がここには見られるわけです。

さて大阪の枚方に松下資料館があります。松下電器には歴史館とか技術館とか博物館は5つ、6つあるかと思えますけれども、松下資料館が一番新しくできたものかと思えます。そこに行きますと、1階には「経営の神様」と言われた松下幸之助を顕彰する意味で、経営に関する本がずらっと並んでおります。経営図書館という形で、古今東西の経営に関する本、特に社史を含む日本の本が多く収められております。2階に上がると、問答室というのがあり、これは一種のバーチャル・リアリティ体験ですけれども、松下幸之助さんがあらわれ

てきて、経営哲学をそこで語られる。それを来館者は聞いて問答をするという部屋が設けられております。このように松下幸之助のアーカイブのほかにも二つの目玉があります。

アーカイブは歴史展示に分類されますが、もう一つ事業展示というのが企業博物館の持っている大きな性格であり、技術を保存し、それを展示するというものです。

例えば吹きガラスは実際にやってみて技術を納得しますが、ビールの発酵は実際には見えない酵母の働きであり、バーチャル・リアリティという手法によってしか見せることができません。こういう技術に基づいてできた製品の展示、特に自社製品を歴史系列に従って並べるといような手法が多くとられておりますけれども、そのことによって会社の過去の栄光が一目瞭然でわかるような形で並べられています。

天理のシャープ工場に行きますと、シャープペンシルがまず展示されている。そこからシャープという名が来たわけですがけれども、関東大震災で被災をして、関西に逃れてきた創業者が始めたのがシャープでありまして、そんなことが歴史的な陳列を眺めていくと理解できるわけです。

それと同時に、製品を並べ、技術を見せて、それをミュージアムショップで販売をするところがあります。

ミキモトの真珠島がその例ですけれども、真珠とりの歴史、そして御木本幸吉が編み出したアコヤ貝を使った養殖真珠の技術、そういう展示を見て、それをミキモトパールのミュージアムショップにつなげていくといようなことが行われている。

これは、集客装置としての事業博物館です。北海道の小樽に行ったときに、北一硝子の社長さんが「うちは企業博物館というよりは、むしろ事業博物館です」と自嘲的に言っていたことですがけれども、たくさんの観光客が来て、ガラ

ス製品をお土産に買っていってもらい、そういう事業を展開するためにいろんな展示をしているわけです。

5 神殿としての企業博物館

企業博物館は一種の神殿と見ることができるとはではないかというのが私の視点です。パンテオンとしての企業博物館であります。

この場合、歴史展示と事業展示に大別できるわけですが、歴史展示は宗教とのアナロジーでいきますと、これはホトケのほうです。それに対して事業展示は現在のビジネスの繁栄を祈願するという意味で、これはカミに近い。神社と寺院というものに囲まれて私たち日本人は暮らしているわけですが、一神教の世界ではなくて、神仏習合です（近代においては神仏を分離というような政策もとられました）けれども、TPOを区別して神と仏とつき合っている世界があり、企業の中においても似たようなことが見られます。

例えば、工場に行きますと、その一画に神社の祠があったり、あるいはビルの屋上に赤い鳥居のお稲荷さんが祀られていたりします。これは会社の事業の発展と操業の安全のために祀られているものであり、けがをしないように、家内安全で、従業員も病気などにならないで働いてほしいという祈願が込められています。と同時に、例えば松下電器の場合ですと、そこに新製品をお供えして、よく売れるようにという祈願をして、商売繁盛につながる祭祀をしています。

かたや、会社はお墓を持っておりまして、高野山とか比叡山にまゐりますと、会社の墓があります。高野山には百幾つかの会社墓とか、企業墓と呼ばれているものがあり、そこでは在職中に亡くなった物故社員の霊をお祀りし、幹部が定期的にそこを訪ねて、鎮魂の祭祀を営んでいます。

日本の会社には、特に大手の会社になりますと、神社やお墓を持ち、慰霊祭

を通して、魂鎮めをしているところが少なくありません。カミはある意味では煽るほうの文化です。これは社会学の大村英昭先生の言葉をかりると煽る文化と鎮める文化、この二つを使い分けているのが日本の会社と宗教に見られる特徴です。一元的に特定のカミあるいはホトケをお祀りするというよりは、両天秤にかけて祭祀をする。企業博物館の機能面からいくと、カミに相当するのが事業展示であり、ホトケに相当するのが歴史展示で、アーカイブの場合も似たような区別ができるのではないかと思います。

アーカイブの持っている機能でいいますと、過去のアーカイブを保存し、そこに人々がアクセスできるようにすること、整理分類をして、検索してアクセスができる、そういう保存の部分、これはホトケの側に相当します。非現用文書に対して、今大きく変わりつつあるのは、カミの側です。政策担当者に対する支援活動をおこなって、情報公開に向けた支援を現用文書で提示をするという機能があるとすれば、これはカミの側に当たるのではないのでしょうか。

6 テンプルからフォーラムへ

その中間に半現用文書というのがあるそうですけれども、これは天国に行くのか地獄に行くのか定まらない魂が存在する煉獄のようなもので、いずれにしても、企業博物館やアーカイブを神殿とみなす考え方があるとすると、今大きく変わってきているということです。テンプルではなくて、むしろフォーラムに変えなくてはならないという主張がなされているからです。

ダンカン・キャメロンが1972年に書いた論文で、ミュージアムというものはテンプルなのか、それともフォーラムなのかと問うています。彼としては宝物を並べておく神殿ではなくて、むしろ来館者がその展示を通して体験すること、そして来館者同士あるいはキュレーターや解説スタッフなどと討論をすることによって開いていく世界、そういうフォーラムが可能な場所として博物館をつ

くり変えるべきではないか、フォーラムこそが新しいミュージアムの形態として望ましいのではないかという問題提起をしたわけです。

7 開かれたミュージアムに向けて

民博ではどういう取り組みをしているか少しご紹介したいと思います。開かれたミュージアム、あるいはフォーラムとしてのミュージアムをめざして、民博で収集したさまざまな情報を公開すると同時に、いかにして（その情報を）保護をするかという難しい問題に直面しています。国立公文書館と似たような課題かもしれません。

もう一つ民博が今進めていることは、博学連携ということです。従来、民博は展示を見に来る学校、団体に対して子供用パンフレットやワークシートなどいろんな便宜を図ってきました。けれど、連携することはありませんでした。しかし、スーツケースのなかに資料を詰めた貸し出しキット「みんぱっく」が学校でも人気を博すようになりましたし、最近では共同研究を通じて私も深くかかわっているのですけれども、学校の現場の先生たちといっしょになって、教室で使えるような指導案づくりに協力をするという試案をつくっています。近隣の学校をターゲットに、授業の一環として事前学習、事後学習なども含めながら民博を活用したカリキュラムづくりが可能ではないかということで、すすめております。博物館と学校が連携をして、より多く資料を利用していただく取り組みがなされていますが、公文書館も学校と連携して展示などができるのではないのでしょうか。

また社会連携としては、地元の市町村とか、経済団体とか、さまざまなグループと連携をして、単に研究活動の公刊あるいは資料の収集・展示だけではなく、情報の持ち腐れにならないようにさまざまな取り組みがなされてきています。

8 博物館行きの汚名返上

民博もそうですけれども、博物館行きというイメージを払拭する努力をずっとしてまいりました。博物館ではなくて博情報館、博情館であるということを梅棹先生が当初おっしゃいましたけれども、これがなかなかゆきわたらない。意図するところは、情報の巨大集積装置としての博物館の役割です。ビデオテープとって、今ではどこの博物館でもやっておりますけれども、そういうビデオ・プログラムをつかって、キーをたたけば瞬時にして世界の人々の暮らし、文化がわかるというようなものを民博が最初につくりました。文科系の施設でありながらIBMの巨大なコンピューターを入れて、情報化を図ったという歴史もあります。

研究部のスタッフに対しては、「知のアバンギャルドたれ」ということで、これも初代館長の言葉ですが、「研究の自由はあるが、研究をしない自由はない」というふうに発破をかけられたわけです。その意図するところは、内発的な研究意欲をいかにかき立てていくかという仕組み、仕掛けの構想にあったわけです。

9 「埃」の汚名返上

博物館というのは、古いものを集めて並べるのではなく、絶えざるイノベーションをして、そして先端的な課題に取り組んでいく、そういう知の殿堂として構想しなければいけないということをたたき込まれたわけです。デジタル化の時代になりますとそれがバーチャル・ミュージアムにもつながり、アーカイブについて言いますと、まさに埃にまみれた「もんじょ」を集積しているところというイメージをいかにして払拭をするかが課題になるのではないかと思います。

N I R A の『政策研究』(Vol.17 No.2)で文献を拝見したのですが、「こうも

んじょかん」から「こうぶんしょかん」へというくだりで、これはNARA（アメリカ国立公文書館）のジョン・カーリンさんの言葉だそうですけれども、「こうぶんしょかん」といえば、もうその次に来るのは「公文情報館」といいますか、あるいは「公情報館」といいますか、パブリックなインフォメーションの巨大集積装置です。それは埃まみれというよりは、むしろプライドのほうの誇りへと転換しなければいけないものであると同時に、過去のもの集積というよりは現在から未来に向かうイメージづくりが必要だろうと思います。そういう意味で先ほどの「政策立案の資源として、情報を公開する」という部分ですけれども、一たんは公文書というものが葬られ、整理分類、保存されるわけですけれども、それがまた蘇る。現在の行政に生かされることもあるでしょうし、先ほど紹介したように、展示の思わぬところでそういうジーンがあったがためにベジタブル・フロートができたような、予期せぬ再生につながっていくわけです。そういう仕掛けがアーキビストのこれからの一つの大きな役割になるのではないのでしょうか。

文書の管理人としての立場ではなくて、むしろ積極的な仕掛け人というような立場、これはプロモーターなのかプロデューサーなのかよくわかりませんが、そうしたスペシャリストとしてのアーキビストを考え、アーカイブズが果たしていく役割を認識することが重要ではないかと私は思ったわけです。ご静聴ありがとうございました。

注 本稿は平成17年1月31日に国立公文書館で開催された、実務担当者研究会議「テーマ：公文書館等の重要性をどのように社会に認知させるか」の基調講演を再構成したものです。